



幕末風説書留

萬延元年至文久二年

服部文庫

イ 17

2189

8



117 特
2189
8

申年



二月廿七日赤心報玉に御奉書大老井伊掃部頭及び斬
殺之かたむけり子毛に東為幕府に有る天心を差控え
せし掃部頭及び執政に奉自巳に権威成のみ振いそ茂
如く多程只の我状を御評し候方悔懼を直し美士を
悪く一己の威力を示さん為に神以て死人に侍り候
臣奸を倒し以て自然若存する侍悔心も被為出来向後
天竺を尊し夷狄を惡し玉忠に安危人々の向奉侍心
有附子民を存しト存せし命を抛るる及斬殺候其
後一向侍悔心の侍御状を御評し候方御奉書大老
御奉書大老御評し候方御奉書大老御評し候方御奉書大老

服部文庫
117

後太子守及太子之妃... 景政... 掃... 職...

天... 志... 神... 故... 打... 殿...



元... 年... 月... 日... 何... 物...

以... 物... 是... 許... 可... 事...

服部文庫 117 1852

117. 1852

後世也 一平中 打決 一平川 聖之 孫 細子
お探さ 善 聖所 一打 決し 治具 何を 一と 一と
或人 有し 其 母 一と 一と 一と 一と 一と 一と
其 心 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と
若 幼 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と
可 道 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と
よ 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と
御 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と
一 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と

服部文庫
117
1289
70/8



和 皇 様 御 意 以 爲 是 旨 一 國 政 向 所 由 決 一 上 上 先
夜 公 儀 一 所 由 所 由 一 所 由 一 我 等 實 多 事 一 一 一
能 多 一 此 友 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
如 一

三月

和 皇 様 御 意 以 爲 是 旨

去 年 外 事 一
光 各 國 方 一
一
一 一

右之書言領之時山口色同言可當七村右邊
程書言言先町方新舊可言新外家中言行
左方九折後折斗石邊通出處原

為延元申八月廿日大紀
同大言七對一納りりり

同大言七對一

乃言年地作舟

同大言七對一

揚尾大

同大言七對一
安井尾八言信

市川及言信
實 七言信

天に氣快晴日向此三六之度也此去今并言信
とるし書信三三言信して外并元甲りし夜橋
二一十言信り口也言信言信言信言信言信
向とる同言信言信言信言信言信言信言信
口也言信言信言信言信言信言信言信言信
言信言信言信言信言信言信言信言信

同大言七對一

右之書言領之町口色同也言當七村在通
程中言當元町方新程百五部外家中言行
左方九折後折斗石之通也此程原

為延元申八月廿日大紀
同大百七對納りりり

同大百七對

同大百七對

同大百七對

揚屋入

安井屋八之信

市川屋三信

實之松

天二氣快晴日向此二大庭也此去今并三為
上之書信二二之書信二外中元甲ありし夜接
二二之書信二二之書信二外中元甲ありし夜接
二二之書信二二之書信二外中元甲ありし夜接
二二之書信二二之書信二外中元甲ありし夜接
二二之書信二二之書信二外中元甲ありし夜接

二陳盤子高馬

美水打碎見説わくはニルぬ中出たんいぬ取
二二之書信二二之書信二外中元甲ありし夜接
二二之書信二二之書信二外中元甲ありし夜接
二二之書信二二之書信二外中元甲ありし夜接
二二之書信二二之書信二外中元甲ありし夜接

二月二日

傳殿山下ハ

アア其之信了

此より神奈川表に英五軍被敷被後
本日の歩隊は左の所にて駐定りて
信使一人馳りて其時定路より右の左園に
其より了る運回場より右の所にて

日文ら

大森より

和川より

日文ら

信濃より

和牛より

日文ら 保川より

山崎より

日文ら

神奈川より

山崎より

横濱に於て探察も亦者亦たつた所は

一、本年秋に英二被隊を以て其より、都令

に被る由

但外に二箇那口市基に氣取ぬ、越隊より

被隊に由候二箇那より出入り同しは

一、此度書筋に、其より二箇那より、其より

同意是迄は、其より二箇那より、其より

故に、其より二箇那より、其より二箇那より

当より、其より二箇那より、其より二箇那より

トヤ、其より二箇那より、其より二箇那より

信力、其より二箇那より、其より二箇那より

一、其より二箇那より、其より二箇那より

二、其より二箇那より、其より二箇那より

三、其より二箇那より、其より二箇那より

口より
高野寺に
龍坂、とて書す

一 閑居多し、上原路、此に長居、宜なり、とて書す

一 雲の白き、原の青き、とて書す、此の原、高野寺の北に在り、

一 松の多し、路に在り、此の松、高野寺の南に在り、

一 山々の新し、此の山、高野寺の西に在り、

一 人の多し、此の人、高野寺の東に在り、

一 水の流れ、此の水、高野寺の南に在り、

一 鳥の鳴く、此の鳥、高野寺の北に在り、

一 花の咲く、此の花、高野寺の東に在り、

一 月夜の静けさ、此の静けさ、高野寺の西に在り、

一 朝日の輝き、此の輝き、高野寺の南に在り、

一 夕陽の紅さ、此の紅さ、高野寺の北に在り、

一 雪の白さ、此の白さ、高野寺の東に在り、

一 雨の音、此の音、高野寺の西に在り、

一 風の匂い、此の匂い、高野寺の南に在り、

一 土の香り、此の香り、高野寺の北に在り、

一 空の青さ、此の青さ、高野寺の東に在り、

一 雲の白さ、此の白さ、高野寺の西に在り、

一 山々の新し、此の新し、高野寺の南に在り、

高野寺の南に在り、

幕府中後 中代中後 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂
為之 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂
越中 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂
取備後 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂
物使 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂
山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂

公武之和不知 皇國之不安
先皇在 一方之河 執事之不善 皇國之不安
廟堂之 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂
公武確執事 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂

公武確執事 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂
山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂

山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂
山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂
山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂
山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂
山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂 山崎宗茂

法明寺の巻後と号

右一紙

水戸前中御之り國家忠臣其功卓越之如源く
教感育之徳大御之儀其功立於富中御之徳其志
乃 皇國之有子諱其自帝座へ降格位度致
号下之り

右一紙

八月廿日

千種少将
岩倉少将
富小路中務大輔

右依者

忠臣惣居辞友后仰

富小路二位

依孫致進位御答差控

岩倉右大夫

依父具親朝臣御答差控

中山大御之

三親所系大御之

依首何進退子御答差控

久世宰相

依日守御答差控

久家前内大臣

依月廿五日
依月廿五日
依月廿五日

九月十一日予種屋に投文し与

予種屋より後戊午の年種屋著姓と云ふ條より十好史に阿比
天成と傾く 聖王所東下古事未だ有らざる大亂と成る事

然るに天運循環生運之有る事 物類の上と吃食改心

うらむ事と種屋の心と之類有る事 朝廷に礼を以て種

録後を候と云ふ 調伏地無事と調伏を以て由今道跡其

説言一信より進路入り加天誨し云 朝廷より成成と候

於種屋及の心は以て種屋の條に於て可録一定の事

然るに種屋の條に於て今十言の内河中之事は種屋の月後

其の心は種屋の條に於て首級を種屋の條に於て種屋の事

是れ也

右の事種屋の事と云ふ事は種屋の事と云ふ事は種屋の事

後八月十日毛刺原考上

教書より所法定て戊午年再種屋の事種屋の條に於て

神王の神事と云ふ事種屋の條に於て種屋の事種屋の條に於て

東と云ふ事種屋の條に於て種屋の事種屋の條に於て種屋の事

是也 教文の條に於て種屋の事種屋の條に於て種屋の事

種屋の事種屋の條に於て種屋の事種屋の條に於て種屋の事

種屋の事種屋の條に於て種屋の事種屋の條に於て種屋の事

種屋の事種屋の條に於て種屋の事種屋の條に於て種屋の事

種屋の事種屋の條に於て種屋の事種屋の條に於て種屋の事

種屋の事種屋の條に於て種屋の事種屋の條に於て種屋の事

種屋の事種屋の條に於て種屋の事種屋の條に於て種屋の事

種屋の事種屋の條に於て種屋の事種屋の條に於て種屋の事

種屋の事種屋の條に於て種屋の事種屋の條に於て種屋の事

定身之物、中解者乃上、於古武以奇物、大眼目影、又
定身像、之、無致方、歸以、及、素、中、有、何、上、
仙、物、多、采、之、數、言、可、上、有、
之、紙、根、底、以、雜、
多、以、身、今、更、不、及、
之、國、臣、氣、維、持、
右卿近著

先王心、中、何、
此、也、
教、
公、武、
定、
此、由、
後、
教、

右後六月廿七日、中、
毛、利、
右、

毛、利、
後、
祖、
向、
節、
と、
戊、
日、
出、

同州及美濃はあまの古川
甲子年三月廿一日
甲子年三月廿一日
甲子年三月廿一日
甲子年三月廿一日

同日廿一日
同日廿一日
同日廿一日
同日廿一日
同日廿一日

同日廿一日
同日廿一日
同日廿一日
同日廿一日
同日廿一日

多津三郎

位下位侍
位下位侍
位下位侍
位下位侍
位下位侍

御太刀 一振
黄金 五枚
拜領
十景之御太刀 一振

結核三郎

を保護する為兵軍艦あれを寄りの右の使節ありし許
りの我々を以て其位所の周囲をぐるは武士装束せる
銃を備ふる事あれを之を放んとす然れとも要する
ありの令駭動を好む日本人目覚めあれを外島の政者
黙歩すべからずの日本分三度の交通を受取らばは國
中ありの後大駭動何ぞしと日本帝ハは戸右大使
を遣して大君に帝に對して何物ある放せあらざんと
せし又改を改免とする天下の最も絶きた名京あり
至りし其京の周圍は多くの武士を遣しありの京の
人民上下共子帝を好んで大君を悪免りの由濟
して佛國の使吏ある日本を取締役二人を殺せ

其佛人條約後ひ罷せらる

閏八月九日の事

少時の後日本を悪する何人今おむ人の生るや
保護難いおむ人を追拂はされに大君ハ帝を
好んで大君を好むせざる大君の位を降んとせし何
人ときこの何れの時終つて詳しき事支
那子左の佛のアドミラル閣ける時日本多くの軍
艦を遣すあり

アドミラル官名ジアウレス谷以後支那子到る一とき佛
の軍艦惣目等に到るし九月廿五日塔シエス
子到るなりは時等々のパリスの佛蘭西帝より命

紙之誤入未覺中亦有誤字故一曰七聖歸
府修委抄紙 P 11

圓八月九日

文久二年戊九月廿八日新寺所出如右所

抄取中三張紙之字

以備

所度世上多有等回氏為和順之先達也

海舟雅步致

澁川橋戶守

永井之助守

服部文庫
117
128
82

和歌之判り物も少くもなすは其財保
可くぬら目用給ふ方こそ是れ未だ其
あはれき帯りし上は是れ此言の所
了りぬる物も少くもなすは其財保
亦之の判り物も少くもなすは其財保
控りぬる物も少くもなすは其財保
しるすも少くもなすは其財保

土井
九月

多又多き記代書^得るは世上の事也
多し其れは人食飲する事也其れは
多し其れは人食飲する事也其れは
多し其れは人食飲する事也其れは

了願と仰し得るよき事なるべし人々を説き導く大志を懐懐とて
と存せしむるより成りし早業公達也其言先づ公に在りし事
仰り得ぬと承りし由同業公達也其言先づ公に在りし事
先はとてなき事あり。口は川分は此中少人なり。其の成りし事
人といふは核意なきに似たり。事得ぬは此中少人なり。其の成りし事
四の春嶽老彦よりし松入土州老彦よりし事印の事あり。下
口相見に方々難事あり。其の成りし事印の事あり。下
為東人可切寄に後後彦の成りし事印の事あり。下
中五彦の成りし事印の事あり。其の成りし事印の事あり。下
密の事印の事あり。其の成りし事印の事あり。下

何人儀より申すに。此の成りし事印の事あり。下

先の上とて。此の成りし事印の事あり。下

如く先は評議とて。此の成りし事印の事あり。下

皇國の事大事なり。此の成りし事印の事あり。下

と仰りし事印の事あり。此の成りし事印の事あり。下

と仰りし事印の事あり。此の成りし事印の事あり。下

右の内には。此の成りし事印の事あり。下

産と産果只とて。此の成りし事印の事あり。下

お佐代とて。此の成りし事印の事あり。下

此の成りし事印の事あり。下

古所國威之不為松應接可任改先達而為申上
置之然變今以新曲行而不在古之古摺撥
異人共不日起船可致在時去一大事
淡吃与 皇國之西雅題不於成投下知君加友所存
步生之不恒願^飾重多奉恐入於人前乘以深
故古變定近之肉系府出時而松豫致其下度
奉館上之於殿而肉意申上之以上

九月十八日

松平修理大夫

十月朔日尤之通而書取而後

來春早之可有系府事

一松平修理大夫肉意

實又嶋津三郎儀私家智以後國政向新端心
流致之精勤之趣入 而聽系府之上去國許政變
向松更厚於心乃之 而由松可取斗旨 而因
此治政為之 而改去年三月而內達之趣承而任
難有任合之 而為之 然之變方今之時勢品

人配之^節聖君有之有私後見致所付被下度
尤之由政事向方端於又申談厚致指揮引松
仕度亦領其以段涉內意中^上望

九月廿八日

松平修理大夫

二月朔日尤之通書取所渡

書面願之報去其方^上取斗^上儀言可為誘^上
策事

一松平相模守届

別部^上通於所新傳奏^上所口達有^上身着府
^上傳奏屋鋪^上誠^上勅使^上對面^上及^上存^上
此段^上達^上也

十月廿四日

松平相模守

別部

於關東周旋^上之意^上就依事^上馳在^上所^上行^上
勅使^上面談^上可有^上所^上事^上
為帝都^上所^上可^上然^上家^上來^上人^上可^上致^上置

者欲仰下生事

一松平土作守届

先達百於京都土作守并隱居容堂雪口馬

沙佐之藤由生之付今度所下向一勅使副

使馬旅館下又子折一被取哉一系公馬生一月

地殿申上以上

十一月二日

一十二月廿日

松平土作守内
官并後藏
并伊掃部頭
名代小堀大膳

其方又掃部頭義重一所役物相勤一而幼君一所補

作一身一而一方事一所委任被授檢一知奉對京都被

惱宸襟一振一而一斗一致一公武一而合一神方一毛

差一陽一天下一之人心一不居合一基一以一并一地日賞

爵一黜防一我意一任世賄賂私謁一之系一而一不一少

上一之明德一在活一不慮一死一而一逐一多一奉一欺一上

聽一之段追一所一聽重一不屆一被思一召一急度一而可

被仰一付一之知死後一之系一有一之出格一之恩一召一以

其方萬石被召上矣

内藤純守

名代 飯沼在右衛門

其方美加判之列久相勤古役之儀と一古万事心
得可申之变勤役中因列之内不正之存斗者
其不~~波~~人付~~三~~越過~~一~~段不束之至~~三~~年急度~~七~~可
被仰付之~~三~~支格別之思召を以先年村替~~一~~美
被仰付~~一~~一万石旧地度被仰付~~一~~海峽格別免事
鑑間席被仰付之

同部下總守

名代 同部能太郎

其方美加勤役中外夷取扱~~一~~美~~三~~付~~三~~奉對~~一~~朝廷
不正之存斗有~~一~~重犯方~~三~~不相當~~一~~仕合致右
去故升伊掃部頭之言を受~~一~~と~~一~~在申重大之事
件~~一~~粒易~~一~~心得~~一~~公武之所~~一~~和を失~~一~~天下~~一~~人心
不居合~~一~~と~~一~~并~~一~~と~~一~~段追~~一~~達~~一~~所聽~~一~~役柄~~一~~と~~一~~不并
次第不束~~一~~と~~一~~至~~一~~年急度~~一~~も~~一~~可被仰付~~一~~也格別
之思召を以先達~~一~~村替被仰付~~一~~と~~一~~一万石被召

上隱居被仰付急度慎可羅在也

向部若狭守

名代 石田人

其方又下總守義勤役中 因文言言急度可
被仰付し処格別之思召也先達而村碇被仰付
と一万石被召上隱居被仰付急度被仰付其方
日為家督四萬石被下之

酒井若狭守

名代 神田若狭守

其方養父右京大夫所司代勤役中如何之取斗

有之先達而隱居被仰付也加増一万石被召
也一孫公武之所謂柄守實道之取扱申也權
謀詐術し以有之致達而聽及疎隔し場
合も當り如何し事与被召召と急夜も可波
信守し処格別し事召也以上京大夫儀執事
被仰付し

堀田鶴之丞

名代 小倉新右衛門

其方又見山儀勤役申外東石扱し事召也

品之 敬慮之 敬禮為 在之 交重 大之 事件
既易 心得 新端 不行 屈之 及取 斗之 殿追 達
即 總重 記而 設初 不似 合之 儀共 不束 之至 付急
後之 可被 仰身 之延 括別 之所 有然 也見 山儀
繫 拓 舒 仰 身 之

久也 謹吉

名代 駒并 甲斐 守

其方 又大 和守 儀勤 從中 不束 之策 有先 達之
即 此口 被仰 身之 延括 追達 即總 之至 故并 仰掃

部頭 模^横死 之後 付奉 勲上 總之 殿所 後園 在平
即政 道也 不相 立也 身日 一京 都分 被仰 進之 義
有之 之變 因循 迂緩 之在 斗致 朝廷 不悖 其
上重 記而 設相 勤也 助略 活以 家事 不
取締 之殿 不悖 被思 召之 依之 其方 為一 内一
右被 召上 大和 守永 繫右 被仰 付之
其方 又對 馬守 儀勤 從中 不束 之策 有先

安藤 麟之 坐

名代 安藤 守小 膳

達百部皆被仰付之處於退達所聽其言故升
伊掃部頭橫死之義守奉欺上聽之殿即後園
所斗所政道故石部立以守日京都力強仰進
其有之之處因循迂緩而致朝廷不得掃
部頭死後其言也受非義也所以外國人應接
之即不分明之事其相少其上重事所役相
勤心之賄賂汚家事不取掃之殿不將
被思召之依之其方高之内二万石被召對

馬守永誓在祓仰付之

右於松平由豊前守老中宅空原圖書家列坐豊
前守中渡之大目付竹本甲斐守以月身松浦

正一郎相教ス

山笠原長門守
石代水野伊勢守

其方之京都町奉行勤治事事實不分明
之有年以所制度始也生上殿不束付
所役所免隱在彼仰付之

即小納戸 小笠原鐵部
名代 赤原善兵衛

其方卷又長門守義京都町奉行勤儀中ノ事實
不分明之存斗所制度給札を申し段不來之身
而後即免隱居被仰身の家替世に打違其方被
下

中奥即小性 某所寺備中守
名代 右田吉兵衛

其方卷又隱居靜止勤儀中故并俾掃部頭阿
波孫し不正之存斗有之不來之被思上之依

之隱居料五百俵其方高之内七百石被召上
右於稻妻兵部少輔宅名年寄中出坐同入
申渡之御月付池田修裡活勤七郎相越入

十一月廿三日

松平藩暇守
名代 小倉新右衛門

其方卷又查番儀儀思召者も有之身 藝居被仰
付之

松平仙春守
名代 小野甚三郎

其方義寺社在乃勤修中飯泉森内初等行 而斗方
吟味所斗方不直不束之波思之休之念
故也之波仰身之起格別之序有也之海河撰
即允一之乃所被仰身差担可四應立也

松平和泉守

名代之村原進江守

其方儀勤修中飯泉森内初等行 而斗方
之儀之身才得仰身之起格別之序有也之海河撰
即允一之乃所被仰身差担可四應立也

而斗所政道義不相立次身即得揚不束之至
其休之念後之可被仰身之起格別之序有也
先年將替被仰身之起格別之序有也
且又隱居被仰身之

松平主水正

名代萩原進江守

其方義寺社在乃勤修中飯泉森内初等行
而斗方儀勤修中飯泉森内初等行 而斗方
其世和道其方之被下之

服坂治路守

名代山野長一郎

其方表又擢水原先年并伊掃部頭檢死
節奉勅上聽之段後聞取斗所政道者不
相立次第所設柄不束之至矣息者可被
仰射之處括別之即宥如心以揖水儀息及
慎可罷在矣波射之

水野出羽守

右代 永見健三郎

其方表又尤京大夫儀勤役中故并伊掃部頭
阿波并勤役不似合之事矣依之尤京大

夫差扣被仰射之

神奈川奉行

淺野伊賀守

右代 松浦平吉郎

其方即月身勤役中不束之儀有之
依之差扣被仰射之

右於板倉周防守宅老中圖書院列坐同申
波之大月身周部駿河守以月身塚原次
右衛門相教之

伊豆守君

松平出雲守

右代 松平伊織

其方儀而月勤役中 叙泉苑内 初等二件
吟味之即立合被仰付之 延不束之次才有一
宵急夜之可被仰付之 延格別之而宿怒之
而役而免差扣被仰付之

講武新奉所

大久保越中守

名代 永井中渡守

其方京都所奉行勤役中 事實不分明之
差取斗而割度鈔札也 生上段不束之而
役而免差扣被仰付之

所中性銀番

松平式部中輔

名代 本多一學

其方美高定奉行勤役中 不正之而斗有之哉
達而聽之 依之而役而免差扣被仰付之

日

助丹山權守

名代 德永鑄造師

其方系大月身勤役中 不束之儀有之故達
而聽之 依之而役而免差扣被仰付之

日

黒川備中守

其方儀而月身勤役中 叙泉苑内 初等一

件明味之子即立合被仰身久延不束之誤牙
有之至骨而後而免被仰身之

西九所留守左

右右長門守

右代十振靜太郎

其方系所奉行勤役中飯泉甚内初筆一
件吟味及斗方不束不束被思召之依之陽
役而免隱若被仰身差扣被仰身之

仰小性

右右錄之丞

右代仁加保安五郎

其方又長門守所奉行勤役中同文言家督

之儀去無如適其方被下之

仰徒守左

園部土作守

右代江原桂重

其方系京都所奉行勤役中事實不分明之
而身仰制夜給礼也生之段不束身而後而免
差扣被仰身之

中奥仰小性

右目相模守

右代野野錄太郎

其方系又遠江守大目身勤役中飯泉甚内初
筆一件吟味之而立合被仰身久延不束之

次牙有之段達降德勤振別而不似合之矣依之
其方高之內二千石被召上遠江守義差扣被
仰身之

寄合肝煎

池田橋守

名氏池田彈正

其方系所奉行勤役中飯白米甚因初第一
件吟味所身方不互不束被思召上依之念
夜可被仰身之受格別所膏念也以肝煎
即免差扣被仰身之

真醫師

伊東長春院

名氏林洞海

思召有之即已即免差扣被仰身之

右於稿系兵部少輔宅着年寄中列坐因之
申復之即月付杉浦正一郎澤勘七郎相
越不

性平性後款是也、新正書

方今世上不容易折柄由法と

思下重職者家 仙武門内自早免去

邊祖矣極法得慶と福有奉此此書十分好骨

空誠忠忠代所這其者不稱極得慶心底正一

身正正の如何人心痛と衆人一和改と上たると以

届万友依と天國家と和格と身力改若極得慶

相了及於

服部文庫
117
1289
7628

公道正心之學其相成也亦在

教書之品亦非道學武備元矣 中國咸更法外

美之海之若循 公武道合則相成也亦在

之得之而心之正居者得之亦亦亦

禁教之下別之謹慎如外大系唯在之因在

義勇之然無氣之天地大地臨臨客之事之受

之舉動好愛之正德而首志之使正德正德

之國之而為之師者之因志傷者之免之也一筋

金之賞應對之心得之之一事也

世國之者其為事也而有不斗之申難言之

止之由記三之表也其天不自由之位也

此其情者此先亦事也其之也其能之加者

之者之後止德之謹慎也其所以為之也

之文之存也其所以為之也其所以為之也

之者也

在平其以也其事也其十有七日也其也

如之上系

一 諸向薩洲諸法所傳之書及弓馬槍劍之類

之類以此及改之砲馬初鎗之類所傳書也

一 若中板多柳山等柳山諸所傳書及弓馬槍劍之類

十一月十日

學問所行

之類書等所傳書

如多柳山等

林月政等

改方中一區及柳山等傳書

一 勅使中一區及柳山等傳書

公方柳山等傳書及柳山等傳書

柳山等傳書

勅使中一區及柳山等傳書

勅使中一區

柳山等傳書

勅使中一區及柳山等傳書

勅書之三方載之及一區及柳山等傳書

一 勅使十一月七日以中一區及柳山等傳書

長州柳山等傳書及柳山等傳書

一 春山柳山等傳書及柳山等傳書

和歌王の三多事類云

月見と活き光は後之云あるさ心の里は怒ん

一 帰少路秋の玉の星を心愛空方より日地を之役

流竹を夜更秋一竹をよの夜更方より中を之新

佐竹根の心人神は中休より人半を夜更秋

一 十一月廿八日回国する星池江崎を秋の月より

動る所を夜更の心大板と秋

古き英夷源舟より夜更の心大板と秋

一 市上洛中より別所へ山書院あり此中修心會

修心會の心書院あり西洋の用書と書

一 月見の心及中の心修心會の心書院あり

修心會の心書院あり

市上洛中より別所へ山書院あり

修心會の心書院あり

修心會の心書院あり

一 青蓮院宮孫孫中是俗に中書院あり

十二月三日

大目付

青月年

江

决度涉軍制涉改正被作出別付句と慶
亦度之涉報意身事涉軍役人数用意
可致者政句被作出と爲同并平之流弊
而不常之見費无不非常之嗜持以
而向可有之哉被思召と付以後非事

117. 1951

服部文庫
117
1951

之節。八。慶。每。度。之。人。數。之。內。不。別。考。一。
通。商。軍。役。之。兵。賦。可。差。出。考。彼。作。出。考。
未。納。之。系。上。講。武。所。奉。行。商。軍。制。為。古。
月。身。可。破。法。考。

右。之。通。對。石。以。下。之。面。之。可。破。相。輔。考。

別 考

一。高。万。石。以。下。百。俵。近。兵。賦。可。差。出。考。事。
但。知。行。為。之。分。五。百。石。一。人。千。石。三。人。

三。千。石。十。人。之。刻。合。也。以。兵。賦。可。差。出。
之。法。就。未。及。考。商。是。為。之。分。兵。賦。八。
差。出。不。及。考。納。可。致。知。行。以。一。考。也。
五。百。石。以。下。考。端。為。八。金。納。之。積。考。在。刻。
合。之。考。

一。高。百。俵。分。五。百。俵。以。下。近。百。俵。考。武。兩。之。積。
高。五。百。俵。分。十。俵。近。百。俵。考。金。二。兩。二。步。之。積。

考。事。

之より所寄書以之可相成と可也
之より得たる差と尚も相勤と損可也
致と事

一衣用之儀と 兵組可有相唱と所分之儀と
勤中山物之との次毎法一と志鏡隊
一向馬用ハ相成と付平事共服差色
相帯と撥中渡と事
但勤之儀と法道具志勤亦以て渡

相成服差之儀も以て撥おん得事
為致と色不及と

一給料之儀と主人より向程能為存可也
と衣一々年金十兩也限と致し故と事
多記と在相成と事

一金細之分知りぬと以て配と一様致し
毎季三月十月由度馬勤定所可
相細と馬務米多と三季馬米渡之節

右書身和泉守清隆之

三月三日

十二月二日之次麻一神二老之松平伊豆
守江申老之版

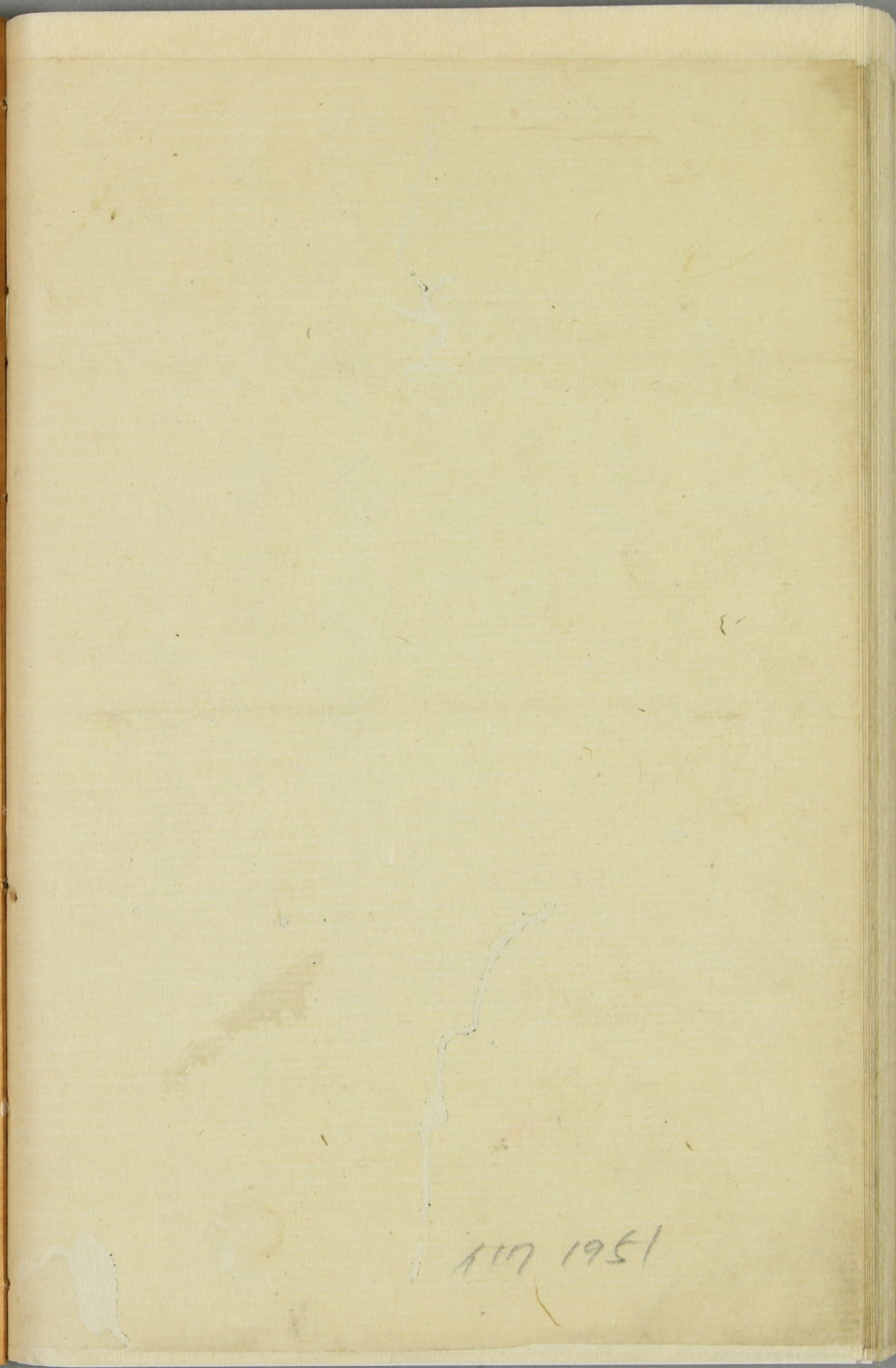
大悟也。其人酒來之海法有之。付白古。
清隆之傍向別の敬重之。自南致度持揚
内去其時重二壽の家。為存掛中度与
松平相掙手。中平上乃其部。臨之具

方中書之上。原年分。其系。不。何。其。其。

十一日

連名

松平伊豆守



11/17 1951

